

JAIR NEWSLETTER

日本国際政治学会

No. 23

April 1983

『戦後日本の国際政治学』の英訳

有 賀 貞 (一橋大学)

日本国際政治学会の会員には、国際的な学界活動を展開している人々は少なく、それらの人々の活躍によって、日本の研究水準は海外に知られてきた。本学会が、ISA(米国)、BISA(英国)の両学会と協定を結び、本学会が推薦する論文がこれら学会の機関誌に掲載されるようになったことも、日本での研究を海外に知らせることに役立っている。

日本の研究業績の国際化をさらに進めるものは、本学会の事業として進められてきた『戦後日本の国際政治学』の英訳出版計画である。日本における国際政治史研究、地域別国際政治研究、国際政治理論研究の発展と現状を展望した『戦後日本の国際政治学』は、日本の研究者にとってきわめて有用な指針であるが、これが英訳されれば、日本における研究状況のガイドブックとして国際的に寄与するところ、まことに大きいであろう。

その編集実務は麻田貞雄氏によって進められ、このほど英訳原稿がひとまず完成するに至ったことは喜ばしい。英訳は邦文版そのままの英訳ではなく、国際版向きに書き改め、場合によってはかなり長く書き加えられた改定原稿をもとにして行われた。当初は翻訳を専門とする機関に翻訳の大部分を依頼したが、それを引受けた機関に実際にはその能力がないことが判明したため、結局、翻訳を主として会員有志に依頼し、その校閲は麻田氏と彼が依頼した信頼しうる外国人学者とによって行なうことになった。本学会には語学力にすぐれた人々が多いとはいえ、何人もの人々から翻訳に協力をとりつけることは容易ではない。さらに英訳された原稿の英文スタイルを整えるための優秀な校閲者を見つけることも難しい。また編集責任者となれば、和英両原稿に目を通して遺漏なきを期さねばならない。

この計画がここまで進んできたことについては、谷川・細谷両前理事長、大島前事務局長、宇野前会計主任の

努力と度量とに負うところが大きく、また文部省等の助成も不可欠であったが、何よりも編集実務の責任者である麻田氏の情熱的努力と力量によるものであるというべきであろう。

麻田氏は、人も知る如くあまりに熱心であり完全に完全主義者であるために、おそらくは学会執行部を辞易させたこともあったかもしれない。このような大事業は彼のような情熱と力量を備えた人がいないとなかなか進まないものである。これだけの規模の英訳出版の編集をすることは容易ではない。私は別の学会でより小規模の英文出版を手がけており、当初予想しなかった難しさを経験している。そのような経験者として、麻田氏の労を心からねぎらいたい。もちろん、一応校閲済みの英文原稿が揃ったといっても、これから出版社に渡す前には、念入りにもう一度英文を見直す必要があり、また出版社との協議も種々必要なので、出版まで少くとも一年半ぐらいはかかるものと予想される。

本学会は研究対象とする学問の性格からして、従来からさまざまな形で国際交流を行ってきたが、今後さらにそれを進めていくべきである。その一環として、今回の『戦後日本の国際政治学』英訳計画はきわめて有意義なものといえよう。英文出版を計画することは、上に述べたように決して容易ではなく、経費の調達という問題もあるが、国際的に寄与することの重要性を考えるならば、困難はあるとしても、続けていくべき事業であろう。今回の計画に声援を送ってきた者の一人として、麻田氏はじめ関係者各位の尽力に感謝するとともに、この事業の完成に向けて、会員の皆様の御支援をお願いしたい。

1983年春季研究大学

5月21(土)、22(日) 於上智大学

学会活動報告

(1983年1月～2月)

- 1月12日 春季研究大会準備のため全会員にアンケートを送、また研究分科会の活動状況に関し分科会責任者にアンケートを送送
- 1月29日 メリーランド大学のボブrow教授を招き共通研究会開催(於私学会館)
- 2月5日 運営委員会開催、アンケートにたいする会員の回答を検討し、春季研究大会の大綱(共通テーマを「アジアにおける国際政治の変動」とし、大会第2日(5月22日)の午後をこれにあてるほか、共通テーマにちなんだ部会を設け、さらに大会第1日(5月21日)午後には「日米摩擦」をテーマとするシンポジウムを聞く)を決定

編集委員会だより

平井友義(大阪市立大学)

1. 機関誌第73号「中東の政治変動(仮題)」(編集責任:丸山直起)は、春の研究大会での配布に向けて鋭意編集中です。
2. 現在、第77号「国際統合の研究(仮題)」(編集責任:鴨武彦)の原稿を公募中です(別掲広告参照)。第76号「国際組織と体制変化(仮題)」(編集責任:緒方貞子)も、まだ柔軟な部分が残っているようです。執筆希望者は、直接編集責任者までご連絡下さい。
3. 第78号以降の刊行予定は、次号のニューズレターで発表致します。(敬称略)

機関誌『国際政治』への寄稿について

機関誌の編集は、現在特集関連論文と自由論題の論文の二本立てで行っています。各号いずれも、公募を原則とし、特集論文については特集の一体性を確保するために依頼原稿を柱としています——ただし、完全公募に徹した号もあり、またそうでなくても毎号必ず公募原稿を掲載しています。

特集関連論文、自由論文(論文、研究ノート、研究動向)を問わず、執筆ご希望の方は、論文題名と要旨あるいは完成原稿そのものを直接編集委員会宛お送り下さい。

書評および書評論文については、単なる執筆希望ではなく、必ず書名をご連絡下さい。

機関誌編集に関わることは、すべて編集副主任が窓口となっておりますので、いつでもお気軽にご相談下さい。
連絡先:〒190 東京都立川市柏町5-5-1

国立音楽大学石川一雄研究室
日本国際政治学会編集委員会事務局

機関誌第77号『国際統合の研究』 (仮題)の原稿募集について

現在国際統合の研究は、国家主権の廃棄のプログラムに比重をおきすぎて実際の国際政治の動態状況との乖離を著しくしたこと、あるいは70年代以降のECにおける統合の鈍化現象の影響などにより、理論研究の面では発展停止状況に直面している。

本特集号では、一つのブレークスルーをめざして、統合現象の動態の特色を国際政治と国内政治の接点・交錯領域においてとらえる理論的視座を新たに設定し全体を構成する。この視座は次の三点で構成する。(1)構成国の対内・対外政策に及ぼす統合の影響の実際——農産品価格の共通化や域外、域内関税の共通化、また共通の通商政策への試みは、各国内の利益集団とその織りなす政治的意志決定の力学にどのような衝撃を与えるか。また軍事的安全保障政策の共通化についてはどうか。(2)軍事力による「脅しの体系」は、統合参加国の外交の実際において、どのように消化・吸収されているのか、あるいは「脅しの体系」は作動頻度を減らしているのか、それとも新たな形態をとりつつあるのか。要するに、統合現象とパワー・ポリティックスの動態は、その実際の展開においてどう異なるのか。(3)国際統合を参加国間の「対外政策の共通化」現象(J・S・ナイ)と広くとらえ、コメコンやASEAN等を含む諸事例を比較する。

各執筆者には、まず対象として統合の地域ないし事例を一つ選択し、その上で、(1)あるいは(2)、を論点として執筆して頂きたい。

執筆希望者は、論題と簡単な要旨を1983年5月末までに提出されたい。原稿締切りは、1984年3月末日の予定(400字50枚)。

連絡・問合せは、直接下記へ。

編集責任者 鴨武彦

〒160 新宿区西早稲田1-6

早稲田大学政経学部

研究分科会の近況

日本外交史分科会

大畑篤四郎(早稲田大学)

日本外交史研究分科会では本レター第20号に掲載した研究活動報告につづき、次のような研究会を開催した。(1982年)

(このほど大山梓会員から以下の追悼文が寄せられましたので、ここに掲載します。—編集部)

山本茂法学博士を悼む

大山 梓 (帝京大学)

博学多識な山本茂先生は『条約改正史』(高山書院)の著者であり、昭和30年12月日本国際政治学会の創立に参加され、長く学会の会計理事を勤められた。旧日本外交史研究会は、先生の御世話の寄附で継続できた。先生は岐阜県出身、東大法学部卒業、商工官僚となられた。常に読書と研究を怠らず、後に学位論文となった名著も、昭和18年7月商工省交易局長の際の著作であった。戦後、中小企業信用保険公庫総裁の激務のなかで、日本外交史研究会の発表を聞きにこられた。著名な蔵書家ながら、商工関係の書物は殆んどなかったという。全国の名所旧蹟を探訪され、また名文の随筆を書かれた。晩年は熱海に閑居、昭和57年2月9日熱海温泉病院で亡くなり、行年81才であった。東京御自宅の御葬儀は遺言により無宗教であった。御墓は富士霊園にある。

7月3日 藤村道生(上智大学)「軍部独裁の成立と崩壊」

9月25日 大山梓(帝京大学)「東京裁判と捕虜虐待」

10月2日 高橋久志(防衛庁防衛研修所戦史部)「汪精衛和平運動をめぐる陸軍・海軍・外務省の態度」

11月6日 増田弘(琉球大学)「石橋湛山の満州事変批評論」

片桐裕子(慶大大学院)「『満州国』における合作社政策——『植民地国家』の農民動員政策の失敗」

(1983年)

1月29日 岩島久夫(防衛庁防衛研修所戦史部)「米マッカーサー・メモリアルにおける日本占領研究シンポジウムについて」

4月以降は想を新たにして活発な研究活動を展開したい。外交史史蹟散歩の提案もあるので、できれば実現したいと思っている。

国際政治経済分科会

山 本 満 (一橋大学)

研究会をつぎのとおりおこないました。

82年12月4日、東京・私学会館で。

マーク・セラルニック(東大大学院博士課程)会員から、「危機と日本の対外政策決定過程」と題して、第1次石油危機(1973年)にさいし「二階堂官房長官談話」に示された日本の第1段階の反応が、どのような経緯で決定されたか、その過程にかかわった各アクターがどのような状況の下で行動したかについて、資料および関係者とのインタビューにもとづく興味深い報告があった。

トランスナショナル分科会

石 川 一 雄 (国立音楽大学)

本年より研究テーマを「エスノポリティックス——エスニックな紛争と国際関係」として、政治学、社会学、人類学、歴史学の領域にわたる研究者の参加を得て、エスニックな集団の位相をさまざまな角度から、さまざまな事例研究を通じて考えてゆくことになりました。

当面は、研究会は東京と大阪で交互に開催し、前責任者の馬場伸也教授(大阪大学)と連係・協力して運営にあたる予定です。つきましては、当分科会の正規のメンバーとして登録を希望される方を募集します。少数民族問題、人種対立、宗教紛争、近代化、国家統合、文化の問題等に関心をおもちの会員のご参加を期待しています。研究会での報告希望も受け付けています。

詳細につきましては、石川までお問い合わせ下さい。

ヨーロッパ国際政治史分科会

平 井 友 義 (大阪市大)

本分科会のメンバーは各地域に散らばっていることもあって、全国的に一本化することが難しいのが実状である。そこで研究大会に部会報告を担当して参加するほか、最近では関東グループと関西グループに分れて、それぞれ独自の研究会活動を進めることにしている。特に関西グループの方では、メンバーの専攻分野の幅を若干拡げて、2~3カ月に1回の割りで研究会をもっている。

82年度の研究会の報告者は次の通り。

1月 豊下楢彦「最近イタリアの政治と外交」

3月 蔵重 毅「国際構造と第三世界」

6月 安藤次男「アメリカ・リベラル派の分裂と再編——冷戦の起源と関連して——」

9月 高屋定国「文革時代の中国をふりかえって」

11月 クリステル・ヨンソン(Lund大)「核大国の平和責任——スカンジナビアからの見解——」

東京地区院生研究会

波多野 勝（常磐大学）

昭和57年度最後の研究会は2月26日教育会館において開催しました。

別枝行夫（成蹊高校）

「戦後日本外交における非正式交渉者」

角南治彦（早大大学院）

「行為体論について」

チューター

中原喜一郎教授（東海大学）

また報告等についての問い合わせは下記波多野までお願いいたします。58年度より幹事を一新する予定です。

大学紹介

青山学院大学国際政治経済学部

杉 山 恭

青山学院大学国際政治経済学部は、今日の国際化社会で求められている「広い国際的視野と知識、そして高度の語学力を備えた人材の育成」を目的に、1982年4月に発足した新設学部である。学部の組織は、国際政治学科と国際経済学科の2学科からなり、国際経済学科は、国際経済学専攻と国際経営学専攻の2専攻に分かれている。

入学定員は、国際政治学科50名、国際経済、国際経営各専攻とも50名、合計150名で、教授陣は、専任、兼任、兼任約75名のスタッフによって構成されることになっている。学部のカリキュラムは、第1・2年次の一般教育課程と第3・4年次の専門教育課程からなり、一般教育は、新設の厚木キャンパスで、専門教育は青山キャンパスで行われる。なお、学部附属機関として、国際政治経済研究所と国際政治経済学会が青山キャンパスに設置されている。

本学部の特色は、(1)徹底した英語教育、(2)学際的な専門教育、および(3)国際経験豊かな教授陣にある。将来、国際場裡での活躍を志向する者にとっては、実践的な語学能力が不可欠との認識から、特に一般教育課程において、英語読解力、記述表現力、聴取理解力、口頭表現力などを重点に、英語の徹底した集中強化教育を行っている。専門教育課程においても、相当数の科目が英語で行われることになっている。

複雑・多様化する国際問題の現実的な対応には、国際政治・経済・経営の関連領域からの統合的な接近が必要条件との見地から、専門教育課程においては、各専攻とも、A群からD群にいたる5種類の専門科目群と地域圏事情科目からなる学際的なカリキュラムが設定されている。A群には、各専攻の専門教育の根幹をなす必修科目がバランスよく配置され、B群とC群には、A群の基礎の上に立って学習すべき各専攻の選択科目が用意されている。D群においては、他専攻の専門科目群が、またE群には、関連他学部の科目が配備されている。地域科目群においては、米州圏、ヨーロッパ圏、環太平洋圏、アジア圏、中東・アフリカ圏の5地域圏について、それぞれ地域圏事情概論が配置され、各地域の政治、経済、社会、文化情勢が多角的かつ総合的に学習できるように設計されている。

本学部は、国際社会に貢献できうるような人材の確保という時代の要請にこたえて、高等教育の部門からこの国家的課題に積極的に取り組むことを意図するもので、設立にあたっては、幅広く内外で国際的に活躍している国際経験豊かな多くの学者、専門家および実務経験者が、その趣旨に共鳴して参加した。教授陣の全員が就任し、本格的に活動を開始するのは84年度からであるが、既に着任している27名の専任スタッフは、世界の舞台にはばたいていく若い国際人の育成に多大の情熱と期待をこめて、目下その準備を進めている。

国際商科大学

原 彬 久

国際商科大学が創設されたのは昭和40年である。その名の通り最初は商学系統の単科大学であったが、51年国際学科と人間関係学科からなる教養学部を増設して今日に至っている。ここにご紹介するのはこの教養学部の国際学科である。

国際学科のカリキュラムは国際関係の理論部門と地域研究部門の2つの柱で構成されている。理論分野は国際政治学・国際経済学・国際法・文化人類学等の基礎科目群と、ナショナリズム・権力論・国際協力論等の特論科目群とに分けられ、地域研究分野ではアメリカ、ヨーロッパ、中国、中近東等の政治・経済・歴史を扱う講座が設けられている。これらはすべて選択科目であるが、学生は理論と地域研究のそれぞれの鳥瞰図を理解するため、2年次から4年次までの間に「国際関係論」および「地域研究論」を必修することになっている。必修といえば演習もそうである。演習は本学科の最も重視する科目で、1年次から4年次まで各学年毎に必ず単位を取得しなけ

ればならない。1年次は1クラス平均20数名、2年次からは10名前後と少人数になり、専門課程の教員がこれを担当する。学生は入学から卒業までにこのゼミナールを足場にして問題意識を發展させ、最後に卒論でその成果をまとめるということになる。

ところで国際商科大学は創学時からアメリカのオレゴン州にあるウィラメット大学と姉妹校提携しており、教授・学生の交流も盛んである。交換教授のほか、学生レベルではこちらからウィラメットの夏期セミナーおよび春期セミナーにそれぞれ数十名が参加し、むこうからは同じく数十名が隔年毎に秋のエクステンション・キャンパスのために本学に來ている。また奨学生の長期留学も行なわれている。最近ではウィラメット大だけでなくサザン・オレゴン州立大、サンディエゴのUS国際大、州立ワシントン大経営学部等とも提携を深めている。国際学科はその性格からいって、とくに外国大学との交流には今後とも力を入れていくことになるだろう。

最初にのべたように国際学科は人間関係学科とともに教養学部を構成しているが、残念ながら当初期待された両学科の連携の妙味は今のところ發揮されていない。人間関係学科は心理学・教育学・社会学の3分野からなり、これらの学問領域と国際関係論とをリンクさせて学際的研究の成果を挙げようとしたのだが、思うようにいっていないというのが正直なところである。ただ両学科間の連携を模索するための議論は絶えず行なわれており、個々の教員がそれぞれ学問的刺激を受ける環境にあることは事実である。

本学はまた付置機関として国際交流研究所をもっており、国際関係の交流、研究とともに一般社会への啓蒙を目的とする各種講演会・シンポジウムなどを開催している。

なにぶん国際商科大学は新しい大学であり、とくに国際学科は産声をあげて7年しか経っていない。目下試行錯誤の最中だが、国際関係論という発展途上の学問にとっては、この学科の新しさは、学問の展開に組織を柔軟に対応させていけるという点では案外メリットになっているかもしれない。

国際交流

カイロ大学日本語学科で教えて

鹿島正裕（金沢大学）

現職につく前、1980年2月より82年6月まで、カイロ大学文学部日本語・日本文学科で日本語・日本事情を教え、国際交流の現場で微力をつくした。同科は、1974年に、日本とアラブの文化交流事業の一環として、国際

交流基金が教員を派遣、教材を提供して発足したもの。近年は、日本人教員4名で文法、講読、漢字、翻訳、文学史、近代史、会話等の講義を分担している。学生は、最初の数年は30～40名も入学してきたが、その後は独自の選抜試験を課し、1学年15名以内に抑えている。大学院課程はまだなく、成績優秀者は文部省給費生として日本で勉強を続けることになる。現在までに合計5名が、こうして日本の大学院で学んでいる。修士号を取れば同科に戻って専任教員となれるが、教授となるには博士号を要する。

このように、各学年に1～2名は相当優秀な者が出ており、彼らの将来の活躍が期待される。しかし、大部分の学生は高給目当てで外国企業就職を目指し、第一志望の英語科や仏語科に入れなかったため日本語科に來た者で、英語すらよく学ばない者が日本語をよく学べるはずがない。まして、アラブ語圏で日本語を学ぶ条件は劣悪である。アラブ語による教科書・辞書は無きに等しい。アラブ語で出版されている日本関係の書物もきわめて少ない。日本映画すら、一般にはほとんど上映されない。エジプトの公立学校の高校までの歴史教育においては、エジプトとアラブ諸国のほかは、植民地主義との関係でヨーロッパ近代史が取上げられるだけで、日本史など何も教えないようだし、ほかのアラブ諸国も同様ではなからうか。

すなわち、学生は日本についてほとんど何も（輸入商品名程度しか）知らずに入学してきて、不得手な英語による教材や辞書を用いて日本語を学ぶのである。しかも、会話力をつけるのに役立たなさそうな日本文化論等にはさして興味を示さないのだが、日本に関する知識がなくては日本語の実力も伸びないわけである。それでも、学生十余万人を擁するカイロ大学の進級・卒業基準は相当——日本のマスプロ大学同様——甘い。かくて、多くの学生は日本語をろくに身につけぬまま卒業していく。もとより英語も十分でないから、在エジプト日本企業に就職できる者は少ない（彼らの可能性を伸ばしてやろうという理解ある企業も少ない）。それを知って、在校生もますます学習意欲を無くすという悪循環で、教師の立場もなかなかつらいものであった。

こうした事情は、他地域での日本語教育にも見受けられる傾向のようで、早急に何らかの——日本留学の機会を拡大する等——対策を講ずべきと思う。

アルコールと国際電話と
——フィンランド遊学の1年間——

佐藤栄一（日本国際問題研究所主任研究員）

1981年の秋から1年間、ヘルシンキのフィンランド日

本国大使館に在外調査員として勤務する機会を得た。その気になれば、十分勉強ができ、それなりにRyugaku (留学)の成果をおげることができたであろうが、なぜかRが次落してYugaku (遊学)に終わってしまった。フィンランド語のレッスンも、数回で放り出した。

着任して間もなく冬を迎えたが、暗く長い夜は切なく、とにかくアルコールに親しむこととなった。幸い、アルコールには不自由しなかった(ダースで買ったため、多数のダンボール箱が帰国のさいの荷物の整理に役だった)。バルチック海を見おろすアパートで、ヘルシンキからストックホルムへ向かうフェリーの定期便を眺めながら、在留邦人や留学生を集めては、夜ごとパーティに明け暮れた。アパートのサウナ風呂とプールは週2回(各1時間)独占的に使用できるため、サウナ・パーティは特に人気を集めた。興がのれば、朝の3時まで営業しているナイト・クラブに繰り出した。

それでも無聊をもてあましたときに愛用したのが、国際電話である。7時間の時差のため、深夜の、あるいは朝の寝込みを襲われた友人は多数にのぼった。なかには、真夜中の電話で赤ちゃんが目をさまして寝つかれず、奥さんのお叱りを蒙ったとボヤキを入れる人、入浴中に呼び出されて風邪を引く人、度重なる電話に悲鳴をあげて「手紙文化」論を開陳、反撃を試みる人、等々がいて、それがまた筆者の電話攻勢に油をそそいだ。或る時、例の如く日本の電話番号を告げ、自分の電話番号を述べようとしたら、ヘルシンキの交換嬢が「シックス・セブン・エイト?」と言ったのには、いささか赤面した。私の電話番号が「678-642」だったからである。ヘルシンキから日本への通話は、交換台を通すと1分間750円であるが、度重なりと馬鹿にならない。(1982年3月からは、ダイヤル直通が使用できるようになったが、こちらは1分間1500円と割高)。その結果、はじめの頃はシバスリーガルだったものが、ジョニ黒に変わり、最後の数か月はジョニ赤になっていた。

帰国のJALのなかで、自堕落な1年間をなつかしく振り返りつつ、日本では気分を一新して学問に励まなければと思いながら、帰国歓迎パーティの発起人を誰れに頼もうかと思案している自分を発見して、度し難い思いに囚われた。

付記：興味をお持ちの方のために、拙稿を若干ご紹介しておきたい。

(1)「フィンランド国防政策の形成と発展——議会国防委員会報告を中心に」『国際問題』1982年5月、(2)「国連の平和維持活動と北欧諸国——フィンランドを中心に」『外務省調査月報』Vol. XXIV 1983、(3)「中小諸国の安全保障——フィンランドのケースを中心に」『ディフェンス・インフォメーション』1983年2月

隣接学会情報

国際法学会春季大会 5月15日(日) 明治学院大学
統一テーマはないが、人権、難民問題等が取り上げられる。

日本政治学会大会 10月8日(土)、9日(日) 早稲田大学
統一テーマ「社会民主主義の再検討」「社会主義と政治指導」(予定)

国際経済学会、アジア政経学会も全国大会は秋に予定しているが、日程等はまだ正式に決まっていないとのことである。

歴史学研究会大会 5月21日(土)、22日(日) 駒沢大学
統一テーマ「東アジア世界の再編と民衆意識」

(今後隣接学会情報を時に応じて御紹介したいと考えます。地域研究を対象とする学会をどの範囲まで取り上げるかなど、難しい点もありますが、情報や御意見をお寄せ下さい。 編集部)

編集後記

百瀬宏会員が事務局長に就任された後を受けて、今回からニューズレターの編集を引き受けることになった。これまでの号は内容が生き生きしており、日頃から受読してきた。今後もこれまでの号の形をほとんど踏襲し、できるだけ質を落とさずに続けていきたいと考えている。ただ、会員の国際体験も多様化しているので、「海外留学」を「国際交流」と改めることにした。なお、編集者の手落ちで、「会員による新著」の原稿をすべて次号に回わさざるをえなかったことを、執筆者の黒柳米司会員にお詫びしたい。

ニューズレター委員会がいささか大げさな顔ぶれになったことを指摘する方もおられるが、もっともな御批判だと思う。ただ、神戸在住の3人については協力して編集に当たっていくという意図を、また東京在住の2人については東京でのフレッシュな情報を収集しようという意図を表わしたものにすぎないことも、御理解いただきたい。その意味で、編集に関する御批判や御提言を、これらの窓口を通じて御遠慮なくお寄せ下さることをお願いしたい(文責：木戸)。

1983年4月10日 発行
日本国際政治学会
ニューズレター委員会
〒657 神戸市灘区六甲台町2
神戸大学法学部
木戸 薔研究室内
発行人 川 田 侃
編集人 木 戸 薔
印刷所 一 (はじめ) 印刷